

ひきこもり傾向を示す青年の心理的特徴  
— 誇大型・過敏型の自己愛および攻撃性との関連 —

Psychological Characteristics of Adolescents with Hikikomori Tendency:  
The Relationships among Oblivious Narcissism,  
Hypervigilant Narcissism and Aggression

塚田 光太郎・幸田 るみ子

TSUKADA Kotaro, KODA Rumiko

キーワード： ひきこもり、青年、誇大型自己愛、過敏型自己愛、攻撃性

## I. はじめに

### 1. ひきこもりについて

近年、就労・就学をすることなく、友人や家族との交流を絶ち、家に閉じこもる「ひきこもり」と呼ばれる青年が増加し、社会的問題となっている。また、ひきこもりには至らないものの、ひきこもりに近い心理的特性を持つ「ひきこもり傾向」の存在も明らかになっている<sup>12) 29) 30)</sup>。内閣府の調査では、「実際に家から全く出ない」「用事があるときだけ出る」といった事実上「ひきこもり」状態にある人が約69.6万人にのぼり、実際にひきこもってはいないものの、ひきこもりに対して親和的な態度をもつ「ひきこもり親和群」の推計は約155万人にもものぼることが報告されている<sup>13)</sup>。

先行研究では、渡部・松井・高塚(2010)<sup>29)</sup>が、ひきこもり親和群の心理的特性には、主にうつ症状を抱えており、他者からの干渉を嫌う傾向があることを報告している。矢嶋・根本(2002)<sup>30)</sup>は、女子大学生を対象にして、ひきこもり傾向と親の養育態度の関連を調査し、女子大学生のひきこもり傾向の心理的特性として、「人のなかでの圧迫感」「人のなかで楽しめない」「孤立」などを見出した。また、母親の支配・介入、過保護といった子どもの主体性を束縛するような養育態度が、ひきこもり傾向に影響を与えることを示唆した。牧・海田・湯澤(2010)<sup>11)</sup>は、同じく大学生を対象にして調査した結果、ひきこもりに肯定的態度をもつ大学生は、友人関係に困難を抱えつつも、不快な情動と向き合いながら、社会に適応していることを示唆している。

ひきこもり傾向を規定する明確な定義は今のところ存在しないが、こうした一連の指摘を概観すると、人間関係での困難さや、軽度の抑うつ・不安の症状を抱えており、ひきこもることに対して肯定的な態度を持ちつつも就学・就労といった社会活動を続けている状態が、ひきこもり傾向として捉えることができるだろう。ひきこもり傾向を示す青年に着目することについて牧ら(2010)<sup>11)</sup>は、「深刻なひきこもり状態を回避するうえでも、ひきこもりに肯定的な態度を示す者に注目することが重要である」と述べている。現状では、ひきこもりの当事者を対象とした実証的な研究は、その状態像を考慮すると実施が困難である。そこで、本研究では、ひきこもり現象の予防と心理的理解の観点から、ひきこもり傾向を示す青年に焦点を当て調査を進めていくことにする。

### 2. ひきこもり傾向と自己愛

ひきこもりの青年に共通する心理的特性としては、自己愛が挙げられる。自己愛は、誰にでも持ち合わせる心性で、自己尊重を支え、自己評価などといった自己に関する心性を維持する機能を持つ<sup>24)</sup>。しかし、多くの専門家が、ひきこもりの青年の特徴として、思春期

特有の自己愛的な構えや、傷つきやすい自己愛を持つことなどを指摘している<sup>7) 21) 26)</sup>。また、青年期は、発達上自己愛が高まりやすいとされ<sup>8)</sup>、ひきこもりの出現が青年期によく見られることから、ひきこもりの青年の心理的特性には、傷つきやすい脆弱な自己愛が関連していることが予測される。

一般的に自己愛は、「ナルシスト」の語源にもなったように、自己への陶醉や顕示欲といった、病的なパーソナリティ傾向のイメージで捉えられている<sup>8)</sup>。自己愛を扱った先行研究でも、自己顕示性や自己陶醉、他者への無関心さなどといった誇大的な特徴を中心に扱われてきた<sup>31)</sup>。近年では、Gabbard (1994)<sup>5)</sup>が、周囲を気にかけず自分の業績を他者に印象付けようとする「誇大型 (oblivious)」と、周囲を過剰に気にかけて、傷つく状況を回避しようとする「過敏型 (hypervigilant)」の2つのタイプの自己愛の枠組みを提唱したのを嚆矢として、両タイプの自己愛傾向、あるいは「過敏型」の自己愛傾向に焦点を当てた研究が盛んに行われている<sup>14) 23) 25)</sup>。この2つのタイプは、対処の仕方が大きく異なっているとされ<sup>5)</sup>、中山・中谷 (2006)<sup>14)</sup>は、「『誇大型』の自己愛は、他者によらず、自己価値、自己評価を肯定的に維持する機能と関連し、『過敏型』の自己愛は、他者によって低められるような証拠がないことを確認することで、自己価値や自己評価を肯定的に維持する機能に関連している」とまとめている。

また、ひきこもり傾向とその心理的特性について、Ronningstam (1998)<sup>18)</sup>がGabbard (1994)<sup>5)</sup>による自己愛の枠組みから興味深い指摘をしている。Ronningstam (1998)<sup>18)</sup>によれば、「過敏型」の自己愛傾向は、一見したところ「誇大型」とは両立しないように見えるが、ひきこもりとつながるような羞恥心をもつ「過敏型」と、顕示性・傲慢さにつながる「誇大型」の自己愛と関連している可能性があるという。そして、日本における対人恐怖症には、脆い自己評価を示唆するものとしての自己愛の「過敏型」との関連性があることを指摘している。

以上のことから、ひきこもり傾向を示す青年は、2つのタイプの自己愛傾向のうち、他者からの評価に過敏に反応し、恥を恐れて人前に出ることを避ける傾向である「過敏型」との関連が予測される。しかし、ひきこもり現象を2つのタイプの自己愛の枠組みから検討した実証的な研究はされていない。高橋 (2008)<sup>25)</sup>は、「青年期の『傷つきやすさ』の違いを理解する上でも2つのタイプの自己愛傾向からアプローチすることは有用である」と述べている。そこで、本研究では、自己愛の定義を上地 (2004)<sup>8)</sup>の定義に準じ、「青年期に高まりやすく、誰にでも持ち合わせるパーソナリティ傾向」として捉える。その上で、ひきこもり傾向を示す青年の自己愛について、「誇大型」と「過敏型」の2つの側面から検討し、関連を明らかにすることを本研究の1つ目の目的とする。

### 3. ひきこもり傾向と攻撃性

ひきこもりの事例の多くで、家庭内暴力が伴うことが知られている。斎藤 (1998)<sup>21)</sup>は、自身の臨床経験から、ひきこもりの半数以上の症例で、家庭内暴力や暴力以外の家族へ

の攻撃性が認められたことを報告している。また、ひきこもりに至るサインとして藤巴(2003)<sup>4)</sup>は、イライラ感や被害的な言動の増加などを挙げている。厚生労働省(2010)<sup>9)</sup>による「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」にも、ひきこもりへ移行する「開始段階」には「幼児のように親にしがみつくなかと思うと、手のひらを返すように暴力的な言動を示すような不安定さと両面性の目立つ時期が続く」<sup>9)</sup>と指摘されていることなどから、ひきこもり傾向を示す段階でも、何らかの形で攻撃性を表出していることが考えられる。

攻撃性は、諸所の分野で異なった定義づけがされるが、一般に心理学における攻撃性は、「他者を傷つける意図を含んだあらゆる行動<sup>2)</sup>」として定義され、暴力のような直接的な攻撃や、皮肉・無視などの言語的・態度的側面、苛立ちや憎しみなどの感情を伴ったものまで含まれる<sup>15)</sup>。この定義に従えば、ひきこもりの状態や、その移行段階で表出される家庭内暴力やイライラ感、暴力的な言動といった多様な症状も、攻撃性の範疇に含まれることになる。しかし、ひきこもり現象と攻撃性を扱った研究は、臨床的見地からの事例報告がほとんどで、実証的研究は渡部ら(2010)<sup>29)</sup>に見られる程度である。渡部ら(2010)<sup>29)</sup>は、ひきこもりを規定する要因として対人恐怖と暴力の症状を有するという調査結果を報告しているが、ひきこもり傾向の段階で表出されると思われるイライラ感や暴言などといった、他の攻撃性との関連については言及されていない。ひきこもりの当事者が表出する攻撃性には早期に対応することが必要とされることから<sup>9)</sup>、ひきこもり傾向を示す段階での攻撃性について検討することも、ひきこもり現象の予防や心理的理解につながるものと思われる。そこで、本研究の2つ目の目的として、ひきこもり傾向を示す青年の攻撃性を、暴力や暴言のような行動的側面と、苛立ちや憎しみといった認知的側面から検討し、関連を明らかにする。

## II. 目的

ひきこもり現象の心理的理解と予防の観点から、ひきこもり傾向を示す青年の心理的特徴と、過敏型・誇大型の自己愛および攻撃性の関連を検討する。

本研究の仮説として、以下の2つを検証していく。

- ① ひきこもり傾向と「過敏型」の自己愛傾向との間には、正の相関を示すだろう。また、ひきこもり傾向が高い人の方が、ひきこもり傾向が低い人より「過敏型」の自己愛傾向が高いだろう。
- ② ひきこもり傾向が高い人は、家族に対する暴力や暴言といった行動的側面の攻撃性が高く、イライラ感や恨みや妬み、被害的な妄想といった認知的側面の攻撃性も高いだろう。

### Ⅲ. 方法

#### 1. 調査期間

調査は、2013年6月に行われた。

#### 2. 調査対象者

東京都内の大学に在学する大学生429名を対象とした。そのうち、記入漏れもしくは無効な回答が見られた76名を除いた353名（男性135名，女性218名，平均年齢19.78歳 SD=1.38）を統計分析の対象とした。有効回答率は82.28%であった。

#### 3. 手続き

同大学における心理学系および教育学系の講義終了後、質問紙による調査を行った。研究の目的と内容を文書と口頭で説明し、調査への協力は自由であることを伝え、質問紙の提出をもって調査への同意が得られたものとした。なお、質問紙は留置法で回収した。

#### 4. 質問紙

質問紙は、フェイスシート（年齢、性別の記入）、ひきこもり傾向尺度、自己愛パーソナリティ傾向尺度、攻撃性尺度（BAQ）から構成された。

- a) **ひきこもり傾向** ひきこもり傾向の測定には、松本（2003）<sup>12)</sup>によって作成された、ひきこもりに関する心理的特性尺度を用いた。この尺度は、ひきこもりに移行する可能性のある青年の心理的特性を測定できる。「他者からの評価への敏感さ」「自己否定・不安全感」「孤立傾向」の3因子、計23項目からなる。本尺度の妥当性は、下田式SPIとの関連によって検証されている。回答は、「はい(2点)」「いいえ(1点)」の2件法であった。
- b) **自己愛パーソナリティ傾向** 自己愛パーソナリティ傾向を「過敏型」と「誇大型」の2つのタイプから測定するため、中山・中谷（2006）<sup>14)</sup>によって作成された、評価過敏性-誇大性自己愛尺度を用いた。自己愛の過敏的側面である「過敏性」、誇大的側面である「誇大性」の2つの下位尺度、全18項目からなる。回答は、「まったく当てはまらない(1点)」から「まったく当てはまる(5点)」の5件法であった。
- c) **攻撃性** 攻撃性の測定には、安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井（1999）<sup>1)</sup>によって作成された、日本版Buss-Perry攻撃性質問紙（BAQ）を用いた。攻撃性の認知的側面である「短気」「敵意」、行動的側面である「言語的攻撃」「身体的攻撃」の4つの下位尺度、全24項目から構成される。回答は、「まったく当てはまらない(1点)」から「まったく当てはまる(5点)」の5件法であった。

#### 5. 統計分析

データの分析には、IBM SPSS Statistics v.21 for Windowsを使用した。

## IV. 結果

### 1. 尺度構成と信頼性の確認

#### a) ひきこもり傾向尺度

ひきこもりに関する心理的特性尺度の23項目について、松本(2003)<sup>12)</sup>の因子構造を仮定し、因子数を3に設定して主因子法(バリマックス回転)による因子分析を行った。因子負荷量が.40に満たない項目が見られたため、当該項目を削除し、再度主因子法(バリマックス回転)による因子分析を行った。その結果をTable 1に示す。

第1因子は、「人の目が気になります」「何事も気にするほうです」などの項目の負荷量が高かったため、周囲からの評価を気にする傾向と解釈し、「周囲からの評価の過敏さ」因子と命名した。第2因子は、「消えてしまいたくなくなることがあります」「何のために生きているのだろうと考えることがあります」などの項目の負荷量が高かったため、自己の空虚感や焦燥感を反映したものと解釈し、「空虚感・焦燥感」因子と命名した。第3因子は、「人間関係がにがてです」「内向的です」などの項目の負荷量が高かったため、交友関係を広めようとせず、考え方が自己の内面に向く傾向と解釈し、「内向性」と命名した。Cronbachの信頼性係数 $\alpha$ は、「周囲からの評価の過敏さ」が.84、「空虚感・焦燥感」が.78、「内向性」が.76であった。

Table 1 ひきこもり傾向尺度の因子分析結果(主因子法、バリマックス回転)

項 目	F1	F2	F3	共通性
<b>F1 : 周囲からの評価の過敏さ (<math>\alpha = .84</math>)</b>				
14 人の目が気になります	.73	.02	.15	.55
2 何事も気にするほうです	.68	.09	.11	.48
20 不安になりやすいほうです	.65	.23	.13	.49
4 世間体を気にするほうです	.62	-.02	.13	.41
3 傷つきやすいほうです	.58	.26	.10	.42
19 落ち込みやすいほうです	.57	.28	.16	.43
15 人から笑われているのではないかと心配です	.49	.27	.22	.36
22 自分のスタイルや外見が気になります	.44	.19	.08	.24
<b>F2 : 空虚感・焦燥感 (<math>\alpha = .78</math>)</b>				
17 消えてしまいたくなくなることがあります	.21	.78	.11	.66
10 何のために生きているのだろうと考えることがあります	.16	.57	.12	.36
18 今の自分が嫌いです	.36	.51	.22	.44
13 精神的にゆとりを持ってないことが多いです	.33	.50	.18	.39
21 孤独だと感じる人が多いです	.34	.44	.24	.37
7 ときどき暴れたいくなります	.04	.43	.06	.19
23 私はひきこもりたいたいと思っています	.01	.43	.29	.27
<b>F3 : 内向性 (<math>\alpha = .76</math>)</b>				
16 人間関係がにがてです	.19	.25	.68	.56
1 内向的です	.20	.09	.61	.43
6 人といっしょにいるのがにがてです	.09	.14	.60	.39
9 自分を表現するほうではありません	.11	-.01	.50	.26
11 外の世界よりも自分の世界にいるほうが楽です	.13	.23	.48	.30
5 ほんとうの自分を知られたくないと思っています	.08	.30	.41	.27
固有値	3.45	2.55	2.26	
寄与率 (%)	16.41	12.12	10.76	
累積寄与率 (%)	16.41	28.53	39.29	
削除された項目 :				
8 イライラすることが多いです				
12 人に相談しないほうです				



## b) 自己愛パーソナリティ傾向尺度

評価過敏性-誇大性自己愛尺度の18項目について、重み付けのない最小二乗法（バリマックス回転）による因子分析を行ったところ、中山・中谷（2006）<sup>14)</sup>の因子数より1因子多い3因子が抽出された。固有値の減衰状況と、因子の解釈可能性から、因子数を2に設定して再度重み付けのない最小二乗法（バリマックス回転）による因子分析を行った。その結果、第1因子・第2因子ともに、中山・中谷（2006）<sup>14)</sup>とほぼ同様の因子構造になったため、第1因子を「誇大性」、第2因子を「過敏性」と命名した。Cronbachの信頼性係数 $\alpha$ は、「誇大性」が.85、「過敏性」が.83であった（Table 2）。

Table 2 自己愛パーソナリティ傾向尺度の因子分析結果（重み付けのない最小二乗法、バリマックス回転）

項目	F1	F2	共通性
<b>F1：誇大性（<math>\alpha=.85</math>）</b>			
11 私には持って生まれたすばらしい才能がある	.81	-.03	.66
9 私は、周りの人からもっと高く評価されてもよい人間だと思う	.75	.19	.59
15 自分はきっと将来成功するのではないかとと思う	.70	-.01	.50
8 私は他に並ぶ人がいないくらい、特別な存在である	.67	.03	.45
1 自分にはどこか、他の人をひきつけるところがあるようだ	.63	-.15	.42
14 自分自身では、要領もいいし、うまく判断のできるような賢さも備えていると思う	.56	-.05	.32
12 自分の体を人に自慢したい	.53	.17	.31
18 自分の考えや感情の豊さ、感受性にはかなりの自信がある	.50	.01	.25
5 私の意見どおりにすれば、もっとものごとがうまく進むのに、と思う	.48	.26	.29
6 私は今まで他の人にはできないような経験をつんできた	.45	.02	.20
<b>F2：過敏性（<math>\alpha=.83</math>）</b>			
16 自分の欠点や失敗を少しでも悪く言われると、ひどく動揺(どうよう)する	-.01	.70	.49
13 他人から間違いや欠点を指摘されると、憂うつな気分が続く	.06	.69	.48
3 人といると、馬鹿にされたり軽く扱われはしないかと不安になる	.01	.68	.47
10 他人から間違いや欠点を指摘されると、自分の全てが否定されたように感じる	.03	.66	.44
4 人に軽く扱われて、あとですごく腹が立つことがある	.11	.57	.34
17 常にすぐれた人や目上の人に認めてもらえなければ、自信がもてない	.08	.57	.33
7 周りの人に自分が変な人に思われているのではないかと不安になる	-.16	.55	.32
2 他の人が私の発言や行動に注目してくれないと、自分が価値のない人間になった気がする	.09	.52	.28
固有値	3.89	3.25	
寄与率 (%)	21.59	18.07	
累積寄与率 (%)	21.59	39.67	

## c) 攻撃性尺度

BAQの24項目について、主因子法（プロマックス回転）による因子分析を行ったところ、安藤ほか（1999）<sup>1)</sup>の因子数より1因子多い5因子が抽出された。因子負荷量が.40に満たない項目を削除したところ、第5因子が単一項目となったため、因子の解釈可能性から4因子解が妥当であると判断し、因子数を4に設定して再度主因子法（プロマックス回転）による因子分析を行った。その結果をTable 3に示す。

第1因子は、「かっとなるのを抑えるのが難しいときがある」「ばかにされると、すぐ頭に血がのぼる」などの項目の負荷量が高く、安藤ほか（1999）<sup>1)</sup>とほぼ同じ項目で構成された

ため、「短気」と命名した。第2因子は、「友達の意見に賛成できないときは、はっきり言う」「誰かに不愉快なことをされたら、不愉快だとはっきり言う」などの項目の負荷量が高かったため、「言語的」と命名した。第3因子は、「権利を守るためには暴力もやむを得ないと思う」「どんな場合でも、暴力に正当な理由はある」などの項目の負荷量が高かったため、「暴力」と命名した。第4因子は、「友人の中には、私のことを陰であれこれ言っている人がいるかもしれない」「陰で人から笑われているように思うことがある」などの項目の負荷量が高かったため、「敵意」と命名した。Cronbachの信頼性係数 $\alpha$ は、「短気」が.73、「言語的」が.75、「暴力」が.73、「敵意」が.68であった。

Table 3 攻撃性尺度の因子分析結果(主因子法、プロマックス回転)

項 目	F1	F2	F3	F4
<b>F1 : 短気 (<math>\alpha=.73</math>)</b>				
6 かつとなることを抑えるのが難しいときがある	.80	-.07	-.17	-.01
8 ばかにされると、すぐ頭に血がのぼる	.63	.01	-.02	.07
13 たいした理由もなくかつとなることがある	.58	-.15	.16	-.02
11 いらいらしていると、すぐ顔に出る	.58	.10	-.22	-.06
4 ちよつとした言い合いでも、声が大きくなる	.51	.13	-.12	.00
<b>F2 : 言語的 (<math>\alpha=.75</math>)</b>				
9 友達の意見に賛成できないときには、はっきり言う	-.05	.78	.00	.00
3 誰かに不愉快なことをされたら、不愉快だとはっきり言う	-.02	.68	.01	-.12
22 自分の権利は遠慮しないで主張する	-.04	.66	.09	-.01
1 意見が対立したときは、議論しないと気がすまない	.16	.53	-.19	.12
<b>F3 : 暴力 (<math>\alpha=.73</math>)</b>				
19 権利を守るためには暴力もやむをえないと思う	-.22	.01	.78	.07
2 どんな場合でも、暴力に正当な理由があるとは思えない*	-.26	-.08	.58	.01
14 挑発されたら、相手を殴りたくなるかもしれない	.46	-.03	.51	-.12
17 人をなぐりたいという気持ちになることがある	.32	.00	.48	.01
21 なぐられたら、なぐりかえすと思う	.23	.19	.43	-.10
<b>F4 : 敵意 (<math>\alpha=.68</math>)</b>				
23 友人の中には、私のことを陰であれこれ言っている人がいるかもしれない	-.03	.13	.14	.71
7 陰で人から笑われているように思うことがある	.21	-.13	-.08	.61
15 私を嫌っている人は結構いると思う	.14	.05	.14	.50
10 私を苦しめようと思っている人はいない*	-.10	-.08	-.02	.48
18 人からばかにされたり、意地悪されたと感じたことはほとんどない*	-.11	-.01	-.07	.43
因子間相関				
	F2	.35		
	F3	.45	.10	
	F4	.40	.01	.21

削除された項目 :

- 5 相手が先に手をだしたとしても、やりかえさない\*
- 12 でしゃばる人がいても、たしなめることができない\*
- 16 人とよく意見が対立する #
- 20 嫌いな人に出会うことが多い
- 24 かつとなつて、物を壊したくなることもある #

注 : \*は逆転項目, #は無関項目



## 2. 相関分析

ひきこもり傾向尺度得点と自己愛パーソナリティ傾向尺度得点、および攻撃性尺度得点から、Pearsonの相関係数を算出した。その結果をTable 4に示す。

分析の結果、「周囲からの評価の過敏さ」において「空虚感・焦燥感」との間に比較的強い正の相関が $(r(353) = .53, p < .01)$ 、「内向性」との間に中程度の正の相関が $(r(353) = .40, p < .01)$ 、「誇大性」との間に弱い負の相関が $(r(353) = -.22, p < .01)$ 、「過敏性」との間に比較的強い正の相関が $(r(353) = .52, p < .01)$ 、「短気」との間に弱い正の相関が $(r(353) = .31, p < .01)$ 、「言語的」との間に弱い負の相関が $(r(353) = -.20, p < .01)$ 、「敵意」との間に中程度の正の相関が $(r(353) = .42, p < .01)$ それぞれ見られた。「空虚感・焦燥感」において「内向性」との間に比較的強い正の相関が $(r(353) = .48, p < .01)$ 、「誇大性」との間に弱い負の相関が $(r(353) = -.16, p < .01)$ 、「過敏性」との間に比較的強い正の相関が $(r(353) = .45, p < .01)$ 、「短気」との間に弱い正の相関が $(r(353) = .27, p < .01)$ 、「言語的」との間に弱い負の相関が $(r(353) = -.11, p < .05)$ 、「暴力」との間に弱い正の相関が $(r(353) = .17, p < .01)$ 、「敵意」との間に中程度の正の相関が $(r(353) = .43, p < .01)$ それぞれ見られた。「内向性」において「誇大性」との間に弱い負の相関が $(r(353) = -.33, p < .01)$ 、「過敏性」との間に弱い正の相関が $(r(353) = .23, p < .01)$ 、「言語的」との間に弱い負の相関が $(r(353) = -.21, p < .01)$ 、「敵意」との間に弱い正の相関が $(r(353) = .28, p < .01)$ それぞれ見られた。「誇大性」において「短気」との間に弱い正の相関が $(r(353) = .19, p < .01)$ 、「言語的」との間に比較的強い正の相関が $(r(353) = .47, p < .01)$ 、「暴力」との間に弱い正の相関が $(r(353) = .17, p < .01)$ 、「敵意」との間に弱い負の相関が見られた $(r(353) = -.16, p < .01)$ 。「過敏性」において、「短気」との間に中程度の正の相関が $(r(353) = .42, p < .01)$ 、「暴力」との間に弱い正の相関が $(r(353) = .14, p < .01)$ 、「敵意」との間に中程度の正の相関が見られた $(r(353) = .41, p < .01)$ 。「短気」において、「言語的」 $(r(353) = .27, p < .01)$ 、「暴力」 $(r(353) = .38, p < .01)$ 、「敵意」 $(r(353) = .30, p < .01)$ との間に弱い正の相関がそれぞれ見られた。「言語的」において、「暴力」との間に弱い正の相関が見られ $(r(353) = .13, p < .05)$ 、「暴力」において、「敵意」との間に弱い正の相関が見られた $(r(353) = .20, p < .01)$ 。「周囲からの評価の過敏さ」と「暴力」 $(r(353) = -.03, n.s.)$ 、「内向性」と「短気」 $(r(353) = .01, n.s.)$ 、「内向性」と「暴力」 $(r(353) = -.09, n.s.)$ 、「誇大性」と「過敏性」 $(r(353) = .09, n.s.)$ 、「過敏性」と「言語的」 $(r(353) = -.04, n.s.)$ 、「言語的」と「敵意」 $(r(353) = .05, n.s.)$ との間ではそれぞれ有意な相関は見られなかった。

Table 4 相関分析

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	
ひきこもり 傾向	(1)周囲からの評価 の過敏さ		.53**	.40**	-.22**	.52**	.31**	-.20**	-.03	.42**
	(2)空虚感・焦燥感	.53**		.48**	-.16**	.45**	.27**	-.11*	.17**	.43**
	(3)内向性	.40**	.48**		-.33**	.23**	.01	-.21**	-.09	.28**
自己愛	(4)誇大性	-.22**	-.16**	-.33**		.09	.19**	.47**	.17**	-.16**
	(5)過敏性	.52**	.45**	.23**	.09		.42**	-.04	.14**	.41**
攻撃性	(6)短気	.31**	.27**	.01	.19**	.42**		.27**	.38**	.30**
	(7)言語的	-.20**	-.11*	-.21**	.47**	-.04	.27**		.13*	.05
	(8)暴力	-.03	.17**	-.09	.17**	.14**	.38**	.13*		.20**
	(9)敵意	.42**	.43**	.28**	-.16**	.41**	.30**	.05	.20**	

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

### 3. ひきこもり傾向の群分け

各尺度の平均値の比較に先立ち、ひきこもり傾向の群分けを行った。まず、ひきこもり傾向尺度は2件法のため、「はい」を2点、「いいえ」を1点として数値化し、加重平均値を算出した。その結果、ひきこもり傾向尺度得点の加重平均値は1.55 (SD=.26) であった。次に、ひきこもり傾向尺度の加重平均値より+1SD高い場合は「ひきこもり傾向群」、-1SD低い場合は「一般群」とした。群分けを行った結果、「ひきこもり傾向群」は58名 (平均年齢19.81歳, SD=1.36)、「一般群」は65名 (平均年齢20.05歳, SD=1.81) となった。

### 4. 自己愛および攻撃性下位尺度得点の差の比較

ひきこもり傾向群・一般群との間で自己愛パーソナリティ傾向尺度の平均値を比較するため、ひきこもり傾向群と一般群を独立変数、自己愛パーソナリティ傾向尺度の下位尺度得点をそれぞれ従属変数とした、対応のない $t$ 検定を行った (Table 5)。その結果、ひきこもり傾向群は一般群よりも、「過敏性」が0.1%水準で有意に高く ( $t(121) = 10.33, p < .001$ )、「誇大性」は0.1%水準で有意に低い ( $t(121) = 4.43, p < .001$ ) ことが認められた。

次に、ひきこもり傾向群・一般群との間で攻撃性尺度の平均値を比較するため、ひきこもり傾向群と一般群を独立変数、攻撃性尺度の下位尺度得点をそれぞれ従属変数とした、対応のない $t$ 検定を行った。その結果、ひきこもり傾向群は一般群よりも、「短気」 ( $t(121) = 4.37, p < .001$ )、「敵意」 ( $t(121) = 9.22, p < .001$ ) がそれぞれ0.1%水準で有意に高いことが認められた。「言語的」 ( $t(121) = 2.83, p < .01$ ) は一般群の方がひきこもり傾向群よりも1%水準で有意に高いことが認められた。「暴力」では、ひきこもり傾向群と一般群との間に有意差は認められなかった ( $t(121) = 1.11, n.s.$ )。

Table 5 自己愛および攻撃性尺度得点の*t*検定結果

		ひきこもり傾向群 <i>n</i> =58	一般群 <i>n</i> =65	<i>t</i> 値
自己愛	誇大性	21.50 (7.49)	27.05 (6.41)	4.43 ***
	過敏性	26.29 (4.64)	17.40 (4.88)	10.33 ***
攻撃性	短気	15.76 (3.86)	12.60 (4.13)	4.37 ***
	言語的	11.72 (3.67)	13.46 (3.12)	2.83 **
	暴力	13.76 (4.19)	12.92 (4.13)	1.11 <i>n.s.</i>
	敵意	18.78 (2.90)	13.88 (2.98)	9.22 ***

\*\*\**p* < .01, \*\**p* < .001

()内は標準偏差

## 5. 男女差の比較

男女差の検討を行うため、性別を独立変数、ひきこもり傾向尺度、自己愛パーソナリティ傾向尺度および攻撃性尺度の下位尺度得点をそれぞれ従属変数とした、対応のない*t*検定を行った (Table 6)。その結果、ひきこもり傾向は1%水準で女性の方が男性よりも有意に高いことが認められた ( $t(351)=2.80, p<.01$ )。自己愛パーソナリティ傾向尺度では、「誇大性」が0.1%水準で男性の方が女性よりも有意に高いことが認められた ( $t(351)=5.11, p<.001$ )。攻撃性尺度では、「言語的」( $t(351)=4.06, p<.001$ )と「暴力」( $t(351)=4.89, p<.001$ )において、それぞれ0.1%水準で男性の方が女性よりも有意に高いことが認められた。「誇大性」( $t(351)=1.58, n.s.$ )および「短気」( $t(351)=1.31, n.s.$ )、「敵意」( $t(351)=.50, n.s.$ )では、男女間に有意差は認められなかった。

Table 6 性差の*t*検定結果

		全体 <i>n</i> =353	男性 <i>n</i> =135	女性 <i>n</i> =218	<i>t</i> 値
ひきこもり傾向		1.55 (.26)	1.50 (.27)	1.58 (.25)	2.80 **
自己愛	誇大性	23.99 (7.16)	26.39 (6.92)	22.51 (6.92)	5.11 ***
	過敏性	22.33 (6.06)	21.68 (6.31)	22.73 (5.88)	1.58 <i>n.s.</i>
攻撃性	短気	14.41 (4.02)	14.05 (4.15)	14.63 (3.93)	1.31 <i>n.s.</i>
	言語的	12.41 (3.14)	13.25 (3.04)	11.89 (3.09)	4.06 ***
	暴力	12.69 (4.32)	14.07 (4.53)	11.83 (3.96)	4.89 ***
	敵意	16.34 (3.45)	16.22 (3.54)	16.41 (3.4)	.50 <i>n.s.</i>

\*\*\**p* < .01, \*\**p* < .001

()内は標準偏差

## 6. ひきこもり傾向と自己愛、攻撃性の関連性について

ひきこもり傾向について、自己愛パーソナリティ傾向および攻撃性との関連性を検討するために、ひきこもり傾向尺度得点を従属変数、自己愛パーソナリティ傾向尺度と攻撃性尺度の各下位尺度得点を独立変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った。その結果をTable 7に示す。

重回帰式の説明率は $Adj.R^2=.43$ で有意であり（ $F(6,346)=45.61, p<.001$ ）、モデルの適合度はやや低い値ながらも、「過敏性」（ $\beta=.39, p<.001$ ）と「敵意」（ $\beta=.25, p<.001$ ）から有意な正の関連性が、「誇大性」（ $\beta=-.26, p<.001$ ）と「言語的」（ $\beta=-.10, p<.05$ ）から有意な負の関連性がそれぞれ見られた。なお、いずれの独立変数で許容度は0.2以上、VIFは5以下であったため、多重共線性は認められなかった。

Table 7 重回帰分析の結果（強制投入法）

独立変数	従属変数:ひきこもり傾向		
	標準偏回帰係数 $\beta$	t値	
自己愛	誇大性	-0.26	-5.35 ***
	過敏性	.39	8.15 ***
攻撃性	短気	.09	1.88
	言語的	-.10	-2.16 *
	暴力	.01	.06
	敵意	.25	5.31 ***

$Adj.R^2=.43, F(6,346)=45.61, p<.001$

\* $p<.05, ***p<.001$

## V. 考察

### 1. 自己愛パーソナリティ傾向の検討

自己愛の「過敏性」について、t検定の結果から、ひきこもり傾向群の方が一般群よりも「過敏性」が有意に高かった。これにより、ひきこもり傾向を示す青年は一般的な青年よりも、他者からの評価に過敏に反応し、恥を恐れて人前に出ることを避ける傾向である「過敏型」の自己愛傾向が高いことが明らかとなった。「過敏性」の項目には、「自分の欠点や失敗を少しでも悪く言われると、ひどく動揺する」「他人から間違いや欠点を指摘されると、憂うつな気分が続く」とあることから、ひきこもり傾向を示す青年は、表面上は対人交流ができていても、他者から批判を受けたり欠点などを指摘されるのではないかという不安や、自己評価が低下することに対する懸念を抱えていることが考えられる。相関分析では、「過敏性」とひきこもり傾向の各下位因子との間でそれぞれ正の相関が見られ、特に「周囲からの評価の過敏さ」「空虚感・焦燥感」との相関が強かった。「過敏性」の自己愛傾向が高いほど、周囲からの評価を過剰に気に掛けやすく、漠然とした不安や焦りを抱えやすい傾

向にあると言える。さらに、重回帰分析において、「過敏性」から有意な正の関連性が示されたことから、「過敏型」の自己愛傾向は、人間関係の不全感や対人場面での苦手意識、内向性といったひきこもり傾向を促す心理的特性であることが推測される。

「誇大性」では、*t*検定の結果、一般群の方がひきこもり傾向群よりも「誇大型」の自己愛が高いことが示された。中山・中谷(2006)<sup>14)</sup>の報告では、「誇大型」は、自信や自尊心につながる自己愛であり、「過敏型」よりも精神的健康度が高く適応的であるとされる。このことから、一般群はひきこもり傾向群よりも適応的に社会活動や就学を営んでいることが窺える。また、相関分析では、ひきこもり傾向の各下位因子との間で有意な負の相関が、重回帰分析では、「誇大性」から有意な負の関連性が見られた。自己愛傾向のうち「自己主張性」が高く、自意識過剰に陥らない程度の自尊心を持つ青年は、友人関係のあり方において「広く深いつき合い方」を営む<sup>17)</sup>ことや、社会的場面で不安や気兼ねを感じない傾向と関連する<sup>19)</sup>ことなどが報告されている。以上のことから、「誇大型」の自己愛は、過剰なものではなければ、自己評価や自尊心を適切に維持・高揚させ、対人関係や社会的場面への適応を促すポジティブな側面を持つことが考えられる。

## 2. 攻撃性の検討

攻撃性の認知的側面である「短気」では、*t*検定の結果から、ひきこもり傾向群の方が一般群よりも「短気」が高いことが示された。つまり、ひきこもり傾向を示す青年の方が、かつとなりやすく、些細なことでイライラしやすいことが分かった。相関分析では、「短気」と「言語的」「暴力」「敵意」のそれぞれの下位因子間で有意な正の相関が見られた。「短気」は、攻撃性におけるパーソナリティの構成概念のひとつで、欲求不満な状況ほど、短気な人は高い攻撃性を示すとされる<sup>10)</sup>。ひきこもり傾向を示す青年は、適応的な生活を送っている人よりも、欲求不満を解消するための機会が少ないため、イライラ感や怒り感情を伴う攻撃性を表出しやすいことが考えられる。日常生活での不全感や、周囲に馴染めないといった欲求不満な状況が、ひきこもり傾向を示す青年の「怒りやすさ」を高めているのかもしれない。

「暴力」では、当初の予測とは異なり、ひきこもり傾向群と一般群との間に有意差は認められなかった。また、相関分析では、「暴力」と「空虚感・焦燥感」との間で弱い正の相関が見られた程度であり、重回帰分析でも「暴力」とひきこもり傾向に関連性は示されなかった。つまり、ひきこもり傾向を示すからといって、他者に対して暴力を振るうことに直結するわけではないことが示唆された。「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」によると、ひきこもりに移行する段階には「準備段階」と「開始段階」が想定されており、このうち家庭内暴力が顕在化するのとは、実際にひきこもりは始める「開始段階」とされる<sup>9)</sup>。この指摘によれば、今回の調査対象となったひきこもり傾向群は、暴力が顕在化するほどの心理的葛藤には至っていない「準備段階」ということになる。しかしながら、BAQの「暴力」は、目の前の相手を攻撃の対象として想定しており、家族に向けられたものではない

点に留意しなければならない。家族に向けられた暴力は、日常生活で蓄積された欲求不満や怒り感情が、その発生源に対して表出されるのではなく、家族に向かって「八つ当たりの」に表出される攻撃行動である。このような、個人が挑発事象を経験したときに、挑発の源泉ではない対象に八つ当たりのような形態で表出される攻撃行動は「置き換えられた攻撃 (displaced aggression)」と呼ばれている<sup>27)</sup>。BAQの「暴力」は、「権利を守るためには暴力もやむをえないと思う」「挑発されたら、相手を殴りたくなるかもしれない」というように、何らかの挑発を受けたり、あるいは自己愛の枠組みでいえば、他者によって自己評価や自己イメージが傷つけられた際の防衛反応として、攻撃性がその発生源に対して表出される内容で構成されている。つまり、BAQでは家庭内暴力のような「置き換えられた攻撃」が測定できていなかったために、当初の予測と異なった可能性が考えられる。普段から対人交流に不安を抱いているひきこもり傾向の青年は、実際場面で他者によって自己愛が傷つけられたとしても、その場で相手に攻撃性を表出することは考えにくい。むしろ、そういった日常場面で溜め込んだ鬱憤や怒りを解消するために、家族に向かって攻撃性が表出されている可能性も考えられるだろう。

「敵意」では、ひきこもり傾向群の方が一般群よりも有意に高く、相関分析でも、「敵意」とひきこもり傾向の各下位因子との間にそれぞれ正の相関が見られた。重回帰分析でも、「敵意」は、ひきこもり傾向と有意な正の関連性が示された。「敵意」の項目は、「友人の中には、私のことを陰であれこれ言っている人がいるかもしれない」「陰で人から笑われているように思うことがある」とあるように、他者の意図をネガティブに捉える認知傾向を反映した内容である。Crick & Dodge (1994)<sup>3)</sup>の情報処理過程理論では、「敵意」が高い者は、あいまいな状況下にあると他者の意図を歪んだ認知で捉える傾向にあり、こうした傾向は敵意帰属バイアス (hostile attribution bias) と呼ばれている<sup>6)</sup>。また、先の自己愛の分析で示された通り、ひきこもり傾向を示す青年は「過敏型」の自己愛を有するため、他者の評価に対して自意識過剰になりがち<sup>14)</sup>である。したがって、ひきこもり傾向を示す青年は、他者からの評価を気にかけてはいるが、自己愛が傷つけられることを極端に恐れているため、自分への意見や評価を相手に直接問いたすようなことをせず、自己の内面で他者の行為やその意図をあいまいに解釈し、自分への評価としてあてはめていることが考えられる。このような歪んだ対人認知は、「過敏型」に共通する特徴であるらしく、Gabbard (1994)<sup>5)</sup>は、その特徴について「過剰に気にかけるタイプにおいては、治療者が椅子の上で体の位置を変えたり、咳払いするたびに、それを退屈の表れと感じる。そして、治療者が机の上の枯れ葉を取り除いたところ、患者は侮辱されたと感じ、治療者を変えたいと要求する。」(館沢, 1997, p.90)<sup>5)</sup>と説明している。田中 (1996)<sup>26)</sup>は、ひきこもりになりやすい人は、相手と「対話する関係」を築きにくいと、「相手は嫌がらせをやっているにちがいない」「自分ばかりが我慢させられている」といった思いが一方的になり悪循環に陥ると指摘している。こうした歪んだ対人認知を繰り返すことで、他者との交流の機会が少なくなり、ひいては、ひきこもり傾向を高めてしまっているのかもしれない。



「言語的」では、一般群の方がひきこもり傾向群よりも言語的攻撃性が高いことが示された。また、相関分析では、「言語的」とひきこもり傾向の各下位因子との間にそれぞれ弱い負の相関が見られた。これは、ひきこもり傾向が高いと言語的攻撃性も高くなるという当初の予測とは異なる結果である。「言語的」の項目を見ると、「くい違いや不利益な点があると自分の意見や考えをはっきりと主張する」「自分の権利は遠慮しないで主張する」とあり、暴言や被害的な言動のような言語による攻撃反応ではなく、他者によって自己愛が揺さぶられた際の、自己主張的な反応の高さが測定されていた可能性がある。相良・相良(2006)<sup>19)</sup>の研究では、BAQの「言語的」と自己愛傾向尺度(NPI)との間に比較的強い正の相関が見られており、自己愛を維持する基本的な攻撃反応として自己主張や議論好きなどの言語的反応が用いられることが示唆されている。本研究でも、一般群に「誇大型」が多く現れたことや、「誇大型」と「言語的」との間に比較的強い正の相関が見られていることなどから、一般群における自己主張性の高さや、議論好きといった自己愛の誇大的側面が反映されたものと考えられる。

### 3. 性差の検討

調査対象者の基礎統計から、ひきこもり傾向の性差の検討を行った。その結果、女性の方が男性よりもひきこもり傾向が有意に高かった。これは、ひきこもりの当事者には男性が多くを占めるが、ひきこもりに親和的態度を示す者は女性の方が多いという調査報告<sup>13) 28)</sup>と一致する。先行研究では、女子大学生のひきこもり傾向には、人間関係で多少の圧迫感を感じていながらも交流を楽しんでいる人がいるという報告がある<sup>30)</sup>。また、女性は他者との関係の中で自己を守ろうとしているという報告<sup>16)</sup>や、ひきこもりたいのにひきこもれず、無理して社会活動を継続している人がいるという指摘<sup>22)</sup>もされている。こうした指摘から、女性のひきこもり傾向は、人間関係において困難を抱えていても、引き下がることはせず、その人間関係を維持することにより、社会に過剰に適応しようとしている姿が窺える。

### 4. まとめと課題

本研究の目的は、ひきこもり傾向を示す青年の心理的特徴と、過敏型・誇大型の自己愛および攻撃性の関連を検討することであった。まず、ひきこもり傾向を示す青年は「過敏型」の自己愛に特徴づけられることが明らかとなった。また、他者との交流を避ける傾向にある一方で、内面には他者に対する敵意や、イライラ感を募らせていたりするなど、認知的側面の攻撃性が高いことが分かった。自己愛に関しては、「誇大型」は、社会への適応を促すポジティブな側面を持つことが示唆された一方で、「過敏型」は、ひきこもり傾向を促す不適応の側面を持つことが示唆された。性差の検討では、ひきこもり傾向を示す青年は、女性の方が男性よりも多いことが示された。この理由について、今回得られた知見だけでは推測の域を出ないが、おそらく、女性のひきこもり傾向には、社会への過剰適応や性役

割といった、摂食障害の背景要因と共通する女性特有の社会文化的な要因<sup>20)</sup>があるものと思われる。今後の研究において、社会文化的背景に着目し検討を重ねることで、女性のひきこもり傾向の実態が明らかになると考えられる。

最後に、今後の課題を述べる。本研究では、自己愛を類型的に捉え調査を進めていったが、Gabbard (1994)<sup>5)</sup>の枠組みでは、「過敏型」と「誇大型」はそれぞれを両極とした連続体を成し、自己愛の障害を抱える患者の多くが、両タイプが混合した様相を呈するとされる<sup>5)</sup>。中山・中谷 (2006)<sup>14)</sup>の調査では、両タイプが含有する「混合型」も、「過敏型」に次いで精神的健康度が低いことが報告されているため、「混合型」との関連についても検討を行うことが今後の課題となる。また、今回の知見が大学生以外の対象に適用できるのかという問題がある。ひきこもりの親和性は、思春期心性が強く現れる10歳から18歳頃だけでなく、青年期以降の発達段階においても高まることが指摘されており<sup>9)</sup>、自己愛もまた、発達と共に連続的に変化する特性であることが示唆されている<sup>14)</sup>。そのため、今後は調査対象を中学生・高校生、あるいは大学生以降の成人などにも広げ、調査を実施する必要があるだろう。加えて、今回用いた尺度の累積寄与率が低かった点や、一部の因子で信頼性がやや低かった点などについては、質問紙の選定を含めた方法上の限界と言える。特に、BAQで測定できなかった家族に向けられる攻撃性については、「置き換えられた攻撃」の枠組みから検討することで、新たな知見が得られるものと思われる。

## 引用文献

- 1) 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦 治・坂井明子 (1999). 日本版Buss-Perry攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討 心理学研究, **70**, 384-392.
- 2) Bushman, B.J., & Anderson, C.A. (2001). Is it time to pull the plug on hostile versus instrumental aggression dichotomy? *Psychological Review*, **108**, 273-279.
- 3) Crick, N.R., & Dodge, K.A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological bulletin*, **115**, 74-101.
- 4) 藤巴正和 (2003). コラム1ひきこもりのサイン 岡本祐子・宮下一博 (編) ひきこもる青少年の心：発達臨床心理学的考察 北大路書房 pp.14.
- 5) Gabbard, G.O. (1994) Psychodynamic psychiatry in clinical practice : the DSM-IV edition *American Psychiatric Publishing* (ギャバード・G.O. 館 哲朗 (監訳) (1997) 精神力動的臨床医学：その臨床実践「DSM-IV版」岩崎学術出版社)
- 6) 濱口佳和 (2002). 攻撃性の情報処理 山崎勝之・島井哲志 (編) 攻撃性の行動科学 発達・教育編 ナカニシヤ出版 pp.40-59.
- 7) 磯部典子 (2003). さまざまな「ひきこもり」の状態像 岡本祐子・宮下一博 (編) ひきこもる青少年の心：発達臨床心理学的考察 北大路書房 pp.36-70.
- 8) 上地雄一郎 (2004). 自己愛の概念と定義 上地雄一郎・宮下一博 (編) もろい青少年の心 自己愛の障害：発達臨床心理学的考察 北大路書房 pp.2-9.
- 9) 厚生労働省 (2010). ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的

治療・援助システムの構築に関する研究

- 10) Krahé, B. (2001). *The Social Psychology of Aggression Psychology Press* (クラエ・B (著) 秦一士・湯川進太郎 (訳) (2004). 攻撃性の心理学 北大路書房)
- 11) 牧亮太・海田梨香子・湯澤正通 (2010). ひきこもり親和性の高い大学生における心理的特徴の検討：友人関係, 不快情動回避傾向, 早期完了特徴との関連について 広島大学心理学研究, **10**, 71-80.
- 12) 松本 剛 (2003). 大学生のひきこもりに関連する心理的特性に関する研究 カウンセリング研究, **36**, 38-46.
- 13) 内閣府政策統括官 (共生社会政策担当) (2010). 若者の意識に関する調査 (ひきこもりに関する実態調査) 報告書 内閣府
- 14) 中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討 教育心理学研究, **54**, 188-198.
- 15) 岡田 督 (2001). 攻撃性の心理 ナカニシヤ出版
- 16) 大谷哲朗・松永昌子 (2004). 過剰適応と無気力の関係に関する研究 比治山大学現代文化学部紀要, **11**, 183-196.
- 17) 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290.
- 18) Ronningstam, E.F. (1998). 日本語版への序 エルザ・F・ロニングスタム 佐野信也 (監訳) (2003). 自己愛の障害 診断的, 臨床的, 経験的意義 金剛出版 pp.3-7.
- 19) 相良陽一郎・相良麻里 (2006). 自己愛と攻撃性の関係について 千葉商大紀要, **43**, 37-59.
- 20) 齊藤千鶴 (2004). 摂食障害傾向における個人的・社会文化的影響の検討 パーソナリティ研究, **13**, 79-90.
- 21) 斎藤 環 (1998). 社会的ひきこもり：終わらない思春期 PHP研究所
- 22) 芹沢俊介 (2002). ひきこもりという情熱 雲母書房
- 23) 清水健司・中山留美子・小塩真司 (2013). 2種類の自己愛モデルにおける相互関係の検討 人文科学論集 人間情報学科編, **47**, 53-67.
- 24) Stone, M.D. (1998). 正常な自己愛 病因的および生態学的展望 エルザ・F・ロニングスタム 佐野信也 (監訳) (2003). 自己愛の障害 診断的, 臨床的, 経験的意義 金剛出版 pp.23-42.
- 25) 高橋美知子 (2008). 高校生における自己愛傾向と学校生活満足感との関連について：親の養育態度からの検討 カウンセリング研究, **41**, 20-33.
- 26) 田中千穂子 (1996). ひきこもり「対話する関係」を取り戻すために ライブラリ思春期の” ころのSOS” サイエンス社
- 27) 淡野将太 (2008). 攻撃の置き換え傾向尺度 (DAQ) 日本語版作成に関する研究 教育心理学研究, **56**, 171-181.
- 28) 東京都青少年・治安対策本部 (2008). ひきこもる若者たちと家族の悩み 平成20年度 若者自立支援調査研究報告書 東京都青少年・治安対策本部総合対策部青少年課
- 29) 渡部麻美・松井 豊・高塚雄介 (2010). ひきこもりおよびひきこもり親和性を規定する要因の検討 心理学研究, **81**, 478-484.
- 30) 矢嶋聡子・根本橋夫 (2002). 女子大学生のひきこもり傾向と親の養育態度 東京家政学院大学紀要 人文・社会科学系, **42**, 111-116.
- 31) 山崎俊輔 (2008). 青年期における自他への攻撃性と自己愛傾向の関連 九州大学心理学研究, **9**, 143-151.

## 謝辞

執筆にあたり、ご指導・ご助言をくださいました幸田るみ子教授、並びに調査に協力していただいた学生の皆さんに心より感謝申し上げます。